

『帝国書院 地理シリーズ 世界の国々』 ヨーロッパ州①』を活用した授業例

東京都府中市立府中第五中学校 中野英水

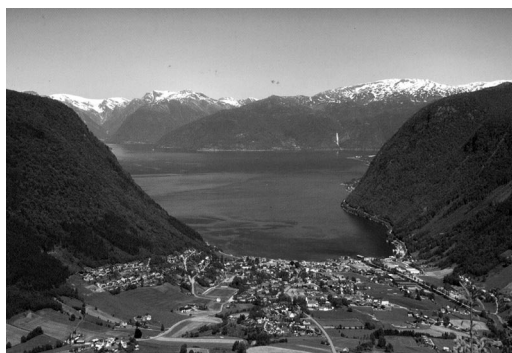
1. はじめに

いよいよ新学習指導要領が完全実施となった。とりわけ今回の改訂では地理的分野での改訂幅が大きく、地誌学習の指導をどのように行おうかとお悩みの先生方も多いのではないだろうか。とくに若手の先生方にとって地誌の指導は経験（なかには自分が中学校時代に地誌を学んだ経験も）なく大きなハードルの一つであることは間違いない。日々の多忙さで教材研究に割ける時間が少ないなか、いかに効率よく良質な資料を収集できるかが良い授業展開の鍵になってくると思われる。

そこで教科書・地図帳、資料集といった教材を補完する第三の教材の存在が大きなものとなる。第一、第二の教材と関連しつつ発展的な記述や資料を完備し、手軽に扱えるサイズや分量をもち、しかも新学習指導要領に準拠した授業に直結する教材が手元にあったならばこの上ない。嬉しいことにこのニーズを満たしてくれる教材がこの春、出版された。図書館向けの教材として編集された『帝国書院 地理シリーズ 世界の国々』である。生徒の学習の教材として使用できるとともに教師が日々の授業づくりをするにも役立つ資料や記述が豊富である。本ページでは完成したばかりの『地理シリーズ 世界の国々』ヨーロッパ州①』（以下、ヨーロッパ地誌本）を手にして思いついた授業での活用例を平成24年度用『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）の内容をもとにいくつかご紹介したいと思う。

2. 「ヨーロッパの自然」の学習での活用

教科書では地形と気候の記述がさまざまな資料とともに掲載されている。こうした自然環境については生徒に実感をもって理解させたいが、とくに北部は氷河に削られた地形だという実感は、生徒にとってはなかなかもてないものである。そのようなとき活用できるのが断面図である。ヨーロッパ地誌本p.9の断面図を示せばアルプス山脈より北側はなだらかな地形が続き、削られてできたことが想像できよう。またスカンディナ비아半島のフィヨルドについても同ページに最適な写真が掲載されている。筆者も以前フィヨルドの写真を探して授業で使ったが、それよりも質の高い写真が掲載されている。



『帝国書院 地理シリーズ 世界の国々』ヨーロッパ州①』p. 9

3. 「ヨーロッパの文化と歩み」の学習での活用

教科書では共通するキリスト教の伝統、多様な言語と民族、ヨーロッパの歩みを学習する。かつて筆者がこの授業の導入に使ったのは人物の写真である。ヨーロッパ地誌本p.13を開き、ゲルマン系、ラテン系、スラブ系の

写真を見せて「どこの国の人ですか？」と問う。生徒はそれまでの経験のなかでヨーロッパ人の民族ごとの顔つきの共通性をイメージとして持っている。ここから民族や文化・宗教の共通性、そして少しずつ異なった点をもとにする対立の歴史へと発展させた。共通点や相違点を自由に発言させたり、イメージを話し合わせたりすれば生徒の豊かな発想が膨らむ資料であろう。またヨーロッパ地誌本の各ページにヨーロッパの人々がさまざまに生活しているようすが豊富に掲載されている。p.59のラップランドにくらすサーミの人々、p.67のアイスランド、p.73の山岳地帯の酪農と移牧などは教科書や資料集にはない貴重な資料だ。項目を意識せずにページをめくっているだけでもヨーロッパ人の生活や文化が鮮やかに見えてくる。



▲ゲルマン系

▲ラテン系

▲スラブ系

〔帝国書院 地理シリーズ 世界の国々③ ヨーロッパ州①〕p.13

4. 「EUへの歩み」の学習での活用

EU統合を学習する際、統合の理由を生徒たちに考えさせる活動は重要である。筆者はヨーロッパの国土や文化、宗教など伝統の共通性、そして対立を繰り返した歴史とヨーロッパの今日的立場を背景に考えさせた。生徒はこれまでの既習知識を集め、平和のため、大国に対抗していくためなどさまざまな自説を発表してくれた。こうした生徒の自説(仮説)を検証する手掛かりとしてヨーロッパ地誌本が活用できよう。p.14～15には教科書よりも詳細なEU統合への歩みの記述がある。利便性だけでなく歴史的背景をともなった壮

大な思いが統合にあることを体感してこそ、統合の課題解決を考える学習にもつながる。

5. 「ヨーロッパ」における環境学習での活用

教科書では環境に関する記述が少なくなったが、ヨーロッパ地誌本p.49にはドイツにおける環境対策の最新情報が掲載されている。教科書の記述に加えてこれらの情報を提示し、これからの環境対策を生徒自ら考えさせる教材として利用する価値は高い。

6. 「単元のまとめ学習」での活用

地誌学習では、対象とした地域の特色を一層理解させるため、単元のまとめの授業も重視したい。筆者はこの単元のまとめをグループで項目ごとに分担して画用紙にまとめ、それを模造紙に張り合わせるという活動を行った。その作成中に多くの生徒から“さらに調べた内容を加えてもいいか”という質問を受けた。学習が進むなかで知的好奇心が高まった現れであろう。そのようなときヨーロッパ地誌本が生徒の手元にあったならば、より学習意欲に目を輝かせて地誌本のページをめくる生徒の姿が見られるに違いない。

7. 「世界の様々な地域の調査」での活用

世界の諸地域の学習が終わると、新学習指導要領大項目(1)中項目エ「世界の様々な地域の調査」の学習に入る。学習の成果を活用して世界の地理的認識を深めさせる単元であるが、この学習の基礎的資料としてヨーロッパ地誌本①②が活用できよう。この地誌本には主要国だけでなく、ベネルクスやアルプス諸国、バルカン諸国やバルト3国などの旧ソ連圏にわたる記述があるので、主要国ばかりがテーマとして並ぶこれまでの調べ学習とは一味違ったものとなろう。調べた生徒にしても、これまで知識が少なかった地域を知る喜びは大きい。生徒の発展学習の教材としてグループに一冊もたせたいものである。